

平成 27 年 10 月 28 日

高大接続システム改革会議「中間まとめ」に関するヒアリング資料

一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会
会長 佐野元彦

1. 高等学校基礎学力テスト(仮称)と大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の一体化を望む。

(1) 検討が深まるにつれ、両者の趣旨や方法論が近似してきたようであり、両者を系統的で連続的なものと捉えることが可能となってきた。ついでにはこの際、学校現場や生徒・保護者の負担など総合的に考え、さらに学力観の統一性を担保し議論の焦点化を図るためにも両者を一本化して単一のテストにすることが望ましい。ちなみに、両者について「中間まとめ」では次のように表現されている。

- ・「高等学校基礎学力テスト(仮称)」: 基礎的な「知識・技能」を問う問題を中心としつつ、「思考力・判断力・表現力」を問う問題をバランスよく出題することとする。(p. 17「テストで測定する資質・能力」)
- ・10段階以上の多段階で本人に結果の提供を行う。(p. 20「生徒に対する段階別の結果提供」)
- ・「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」: 「知識・技能」を十分有しているかの評価も行うことに加え、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する。(p. 40「①目的・対象者」)
- ・問題の難易度をできるだけ広範囲に設定する。…選抜性の高い大学が…活用できるよう高難度の問題を選択できるようにする。(p. 44「難易度設定の考え方」)
- ・結果の多段階による表示による提供を行うこと (p. 44「結果の表示の在り方」)
- ・「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」と「高等学校基礎学力テスト(仮称)」について連携体制あるいは統合的体制が必要なこと… (p. 44「実施体制、実施場所等」)

(2) 補強意見

生徒は高校2年次あるいは3年次当初の段階ではまだまだ進路志望先を絞りきれないのが実情である。また専門高校においても大学進学が5割を超える学校もあることや、就職希望者も生涯学習の視点に立てば「高等学校基礎学力テスト(仮称)」「大学入学希望者学力評価テスト」のいずれを受験するかはさらに悩ましい。学校としても2種類のテストへの対応と進路指導をどう関係させるか難しい課題を抱えることになる。以上の観点からも2種類のテストを併存させる意義が疑わしい。

2. 受験料負担の軽減を望む。

(1) 新たなテストが導入されれば、それが家庭の経済的負担を重くするのは明らかである。特に、困窮する家庭にとっては数千円の受験料負担は心理的にも経済的にも負担感が強く、学習機会からの脱落に繋がりがかねない。学力の確保は社会の要請であり、生徒が自らの意思と責任で学力保証する形は疑問を禁じ得ない。本来の学力保証の観点からすれば「高等学校基礎学力テスト(仮称)」は悉皆で行うべきだが、悉皆・希望制に拘わらず費用は国・自治体が全額負担すべきだと考える。

(2) 多種多様な検定試験の活用が謳われており、進学にも就職にも生徒は自己の学力保証の手段としてこれら試験の結果や資格を明示しなければならず、従来以上に負担がきつくなり保護者の検定料負担は相当増加するとみられる。是非この視点からの改善を期待する。

3. 教員の指導力向上について根本的な改革を望む。

「中間まとめ」に謳われた高校教育改革を推進するには教員の指導力向上が不可欠であるが、その具体策は OJT による研修制度の精密化に頼っており、かえって学校現場の負担と混乱を引き起すのではないかと危惧される。効果的な研修の前提条件としては①日常の教育活動とは別にゆとりある仕組みで研修が受けられること、②教員が自分の課題を自ら発見し自ら取組む研修を保障すること、この2点が重要だと考える。特にアクティブ・ラーニングの視点からの指導方法の改善など新たな課題については、次のような抜本的な対策が望まれる。

- (1) まず、現職教員の中にアクティブ・ラーニングの指導方法に習熟した指導的教員を確保することが不可欠であり、その育成が急務である。育成に当たっては、職場や業務を離れた研修が重要である。一方で、中長期的視点に立った教員養成プログラムを策定すべきである。
- (2) 研修全体を貫く基本姿勢としていわゆる Off-JT での研修を基本に制度化すべきである。初任者研修や10年目あるいは15年目などの節目では1年間の Off-JT 研修、ベテランにはサバティカル休暇を付与することも一計であり、研修の仕組み自体が優秀な人材を招くような魅力ある制度になるよう工夫すべきである。

4. サンプルテストの提示を望む。

これまでも繰り返し要望してきたが、できるだけ早くサンプルテストを提示していただきたい。この高大接続システム改革会議が始まってからでも既に1年半以上経過した。しかしながら未だにサンプルが提示されないために「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」のイメージがつかみにくく、議論の土台が常に不安定であると感じる。研究諸機関がこれまで取組んできた蓄積を生かして早急にサンプルテストを開発すべきである。